

スゴー・カレン語の動詞連続

加藤 昌彦

(東京大学大学院)

Verb Serialization in Sgaw Karen

KATO, Atsuhiro

Graduate School, University of Tokyo

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 0. はじめに | 5.2 本動詞+補助動詞 |
| 1. 動詞連続 | 5.2.1 補助動詞の記述 |
| 2. 動詞の認定 | 5.2.2 補助動詞 <i>thɔ̄</i> と <i>lō</i>
(カレン語の「方向動詞」) |
| 3. 主語と目的語 | 5.3 法動詞+本動詞 |
| 4. スゴー・カレン語の動詞連続の分類 | 5.3.1 法動詞 <i>bâ</i> , <i>kr̄y?</i> , <i>mô</i> |
| 5. <i>tə-</i> +V1+V2 となるもの | 5.3.2 使役動詞 |
| 5.1 本動詞+本動詞 | 6. V1+ <i>tə-</i> +V2 となるもの |
| 5.1.1 繙起的な事象を表すもの | 7. <i>tə-</i> +V1+(<i>tə</i>)+V2 となるもの |
| 5.1.2 移動や存在の動詞を V1 として持ち,
繙起的でないもの | 8. おわりに |
| 5.1.3 V2 が V1 の目的語となっているもの | |

0. はじめに

カレン族はタイ西北部の山地からビルマ(ミャンマー)のイラワジ・デルタにかけて居住する東南アジア有数の民族である。カレン族と総称される民族には数多くの下位集団があるが、そのうち最も主要な集団は、スゴー・カレン(Sgaw Karen)とポー・カレン(Pwo Karen)である。カレン族の話す言語は、語彙的にはチベット・ビルマ系言語との一致を示すものの、文法的にはむしろタイ系諸言語やモン・クメール系諸言語と似通っており、この特徴のために、東南アジア諸語の系統を考える上でのひとつの謎とされる。

本稿で扱う言語はスゴー・カレン語であり、これはカレン系諸族間の共通語ともなっ

ている。本稿の目的は、このスゴー・カレン語の動詞連続を分類・分析し、その特徴を明らかにすることにある。スゴー・カレン語自体にも様々な地域的変種があるが、本稿で対象とするのはビルマ側で最も標準的に通用しているものである。調査はタイ国メーホンソーン県メーサリアン(1991年3月)および日本国内(1991年~1992年)で行った。タイ国メーサリアンでの調査協力者はMr. Phu Tah Mooである。彼はビルマのカレン州出身で、現在はタイ側に住んでいる。一方、日本での調査協力者はMiss Ler Paw Sawである。出身はビルマのラングーン(ヤンゴン)であるが、家族の仕事の関係で日本に滞在していた。

スゴー・カレン語の文法に関する先行研究

には Jones (1961) や Ratanakul (1981, 1983) などがある。Jones はビルマのスゴー・カレン語を、Ratanakul はタイのスゴー・カレン語をそれぞれ研究対象としている。当然のことではあるが、本稿で扱うスゴー・カレン語は Jones のものに近い。筆者はメーサリアンにおいてタイ側のスゴー・カレン語も調査したが、ビルマ側のものとタイ側のものでは、音韻・語彙・文法などすべてのレベルで少なからぬ違いが見出された。

本論中、単にカレン語と呼ぶ場合には、筆者が調査対象としたビルマ側のスゴー・カレン語を指すものとする。

本稿で扱うカレン語の音素目録は次の通りである。

音節構造 $C_1(C_2)V(?)T$

子音音素

p	θ	t	c	k	?
ph		th	ch	kh	
b		d			
m		n	r	ŋ	
s		ɸ	x	h	
sh					
z			ɣ	ɦ	
w			j		
l		r			

(C_2 : w, l, r, ɣ, j)

母音音素

i	ɯ	u
e	ɤ	o
ɛ	a	ɔ

軽声音節

$Cə(-)$

声調素

má	高平	[55]
ma	中平	[33]
mà	低平	[21]
mâ	高降	[41]

以下に注意すべきもののみ説明を加える。

- /θ/ は [θ~tθ~t̪]
- /c/ は [tɸ]
- /b/, /d/ はともに有声入破音
- /r/ は [r~r̪~ɹ̪]
- /ɣ/ は C_1 として [ɣ], C_2 として [ɯ]
- /-h/ は有氣音
- 軽声音節の母音は常に [ə]。また絶対語末には決して現れない。なお軽声音節の直後に語境界がある場合にはハイフンを付け加える。
- 4つの声調のうち後ろに末子音/?/を従えられるのはmaとmàのみ。

1. 動詞連続

中国大陸から東南アジアにかけての諸言語には、動詞あるいは動詞句がその間の関係を明示する標識の介在なしに配列される現象が一般的に見られる。この現象を動詞連続と呼ぶ。この用語は2つの下位概念を含んでいる。ひとつは動詞そのものが直接並べられる場合であり、もうひとつは動詞の間に名詞句や前置詞句などが介在している場合である。例えば Solnit (1986, pp.88-89) は、前者を verb concatenation と呼び、後者を VP-series と呼ぶ。そして両者を含む上位概念を verb serialization と呼んでいる。

つとに知られていることであるが、名詞句が介在する動詞連続は、当該地域の言語のうち SVO 型の言語に圧倒的に多く見られる。一方 SOV 型の言語には、動詞そのものの連続はあってもその間に名詞句が割り込んだりすることがあまりない¹⁾。下に SOV 型言語の例としてビルマ語の文を、SVO 型言語の例としてタイ語の文を挙げる。ビルマ語の例では2つの動詞が隣合っているのに対し、タイ語の例では2つの動詞の間に名詞句が介在している。

1) Wheatley (1985) の報告によれば、中国南部のイ語はSOV型の言語でありながら名詞句が介在する動詞連続を持っている。

ビルマ語

cənɔ̃ saŋou? pha? cì dɛ
私 本 読む 見る(動詞文指標)
「私は本を読んでみる」

タイ語

phǒm qāan náŋsú w duu
私 読む 本 見る
「私は本を読んでみる」

カレン語にも周辺諸言語と同様に動詞連続が見られる。また、当該地域のSVO型言語の例に洩れず、動詞の間に名詞句や前置詞句が介在することもある。しかし、以下の記述で明らかになるように、カレン語では名詞句や前置詞句が介在する動詞連続よりも、動詞が直接隣合う SOV 型の動詞連続のほうがむしろ好まれているようにも見える。

2. 動詞の認定

本稿では、否定の法助辞 tə- が前接することができる語をすべて動詞と呼ぶこととする。例えば lε 「行く」には tə- が付いて、tə- lε (bâ) 「行かない」²⁾ とができるが、khô 「頭」には決して tə- が前接しない。よって、lε は動詞であるが、khô は動詞ではない。

カレン語の動詞を、動作動詞・状態動詞などに下位分類できる可能性もある。しかし、動的な事象を表す動詞と静的な事象を表す動詞とを分かつ明確な統語的基準は見出し難い。よって本稿では動作動詞と状態動詞を敢えて区別することはしない。

また、動詞の多くは单一の形態素からなるけれども、複数の形態素からなるものもある。例えば θwē sú 「削る」は、前部要素も後部要素も単独で現れることができ、ともに「削る」という意味を持つ。しかし、この組み合わせは固定しているため、おそらく後述する

動詞連続に含めるべきではなく、单一の単語と見るべきものである³⁾。また、名詞形態素と動詞形態素の組み合わせからなる動詞も 2 つ見つかっている。それは nà pȶ (耳+通る) 「理解する」と nà hú (耳+聞こえる) 「聞こえる」である。この 2 つの否定形式はそれぞれ tə- nà pȶ と tə- nà hú であり、否定辞が名詞要素の前に前置されることから、これ 1 つで单一の動詞であると考えられる。ちなみに khô shá (頭+痛い) 「頭が痛い」の否定形式は khô tə- shá となり、否定辞が名詞要素ではなく動詞要素の前に置かれる。よってこれは单一の動詞とは考えられない。

3. 主語と目的語

文には様々な名詞句が現れる。そのような名詞句のうち、動詞の前に直接置かれた名詞句を「主語」(ただし主語と動詞の間には法助辞⁴⁾が介在し得る) と呼び、動詞の後ろに直接置かれた名詞句を「目的語」と呼ぶことにする。例えば、

jə- kwà tàyōwú
lsg 見る 映画
「私は映画を見た」

においては jə- が主語であり、tāyōwú が目的語である。

カレン語では、いかなる動詞も主語を取り得る。主語として現れる名詞句は、動詞が表す事象の動作主であったり、経験者であったりする。以後、便宜的に主語名詞句の表す意味役割をまとめて動作あるいは状態の「主体」と呼ぶことにする。

目的語について見れば、次に掲げるとおり、(1) 目的語をまったく取り得ないもの、(2) 目的語を 1 つ取り得るもの、(3) 目的語を 2 つ取り得るもの、の 3 種類がある。

(1) 目的語を取り得ない動詞

- 2) 否定文は、動詞に tə- を前置し、文末に助辞 bâ を置くことによって作られる。ただし、助辞 bâ の出現は必須ではない。
- 3) 単独の場合と複合した場合の意味の差異は、今のところ明らかではない。
- 4) 法助辞には、否定を表す tə-、叙想(非現実)を表す kə-、意志を表す θákə- などがある。

ここには状態や状態の変化を表す動詞が多く含まれる。

ex.) jə- khô shá

lsg 頭 痛い

「私は頭が痛い」(直訳:私の頭が痛い)
また、「行く」「来る」のような移動を表す動詞もここに含まれる。

ex.) jə- le shú phjá

lsg 行く へ 市場

「私は市場へ行く」

カレン語では移動の終点を表す名詞句は目的語となり得ない。従って、この文で移動の終点を表す phjá 「市場」は、前置詞 shú を伴って現れている。ただし、le có (行く+学校) 「学校に行く」の場合にのみ shú が伴わなくともよい。たぶんこれは慣用表現と見做すべきであろう。

(2) 目的語を1つ取り得る動詞

目的語を1つ取り得る動詞は非常に多い。大抵の場合、目的語となる名詞は動作の対象を表す。カレン語では、タイ語・カンボジア語・ベトナム語などと異なり、場所や道具を表す名詞句が目的語として現れることはない。

ex.) jə- tò ?ɔ

lsg 殴る 3sg

「私は彼を殴った」

(3) 目的語を2つ取り得る動詞

目的語を2つ取り得る動詞はそれほど多くはない。次に挙げる7つの動詞がある。

hē 与える ko? 呼ぶ

θôlô 教える shá 売る

hêtôlô 貸す té 語る

xêtôlô 借りる

2つの目的語のうち、受領者を表すものを間接目的語と呼び、対象を表すものを直接目的語と呼ぶことにする。語順は、動詞+間接目

的語+直接目的語となる⁵⁾。

4. スゴー・カレン語の動詞連続の分類

カレン語の動詞連続は、2つの動詞からなるものが最も基本的であり、すべての動詞連続をここに還元して捉えることができる。以下、前側に置かれた動詞をV1、後側に置かれた動詞をV2と表す。カレン語の動詞連続は否定辞 tə- の置かれる位置によって次の3つに分類することができる：①常にV1の前に否定辞が置かれるもの、②常にV2の前に否定辞が置かれるもの、③V1とV2の両方に否定辞を前置できるもの。第3の場合には、否定辞が必ずV1とV2の両方に付くとは限らず、V1の前だけに置かれることもある。また、①は、本動詞のみからなるもの、本動詞と補助動詞からなるもの、法動詞と本動詞からなるもの、の3つに分けることができる。

① tə-+V1+V2となるもの

[1] 本動詞+本動詞

[2] 本動詞+補助動詞

[3] 法動詞+本動詞

② V1+tə-+V2となるもの

③ tə-+V1+(tə-)+V2となるもの

以下、これら各々について詳しく見ていくことにする。

5. tə-+V1+V2となるもの

否定辞がV1の前のみに置かれる動詞連続である。ここに含まれる動詞連続では、名詞句や前置詞句が動詞の間に割って入ることが決してない。Solnit (1986)の用語を用いれば、すべて verb concatenation だということになる。

5) 対象を表す名詞句の前には前置詞 l̥s (一般的には場所を表す) が置かれることがある。例えば次の通り。

jə- kə- hē na l̥s tâ ?i
1sg(叙想) 与える 2sg もの この
「あなたにこれをあげましょう」

$tə-$ +V1+V2 となる動詞連続を構成する各々の動詞は、単独で述部を構成することのできる動詞であったり、単独では述部を構成することのできない動詞であったりする（述部とは單文における主語を除いた部分である）。このうち単独で述部を構成することのできる動詞を、「本動詞」と呼ぶ。単独では述部を構成することのできない動詞には、「補助動詞」と「法動詞」がある。 $tə-$ +V1+V2 となる動詞連続は、それを構成する動詞が本動詞であるか補助動詞であるか法動詞であるかによって、次の3つに分類することができる。

- [1] 本動詞+本動詞
- [2] 本動詞+補助動詞
- [3] 法動詞+本動詞

以下では、この3つそれぞれについての説明を行う。なお、説明の便宜上、 $tə-$ +V1+V2 となる動詞連続の直前に置かれた名詞句を「動詞連続の主語」、直後に置かれた名詞句を「動詞連続の目的語」と呼ぶことにする。

5.1 本動詞+本動詞

否定辞の位置が $tə-$ +V1+V2 となるもののうち、本動詞と本動詞からなる動詞連続には、

- (a) 繼起的な事象を表すもの
 - (b) 移動や存在の動詞をV1として持ち、継起的でないもの
 - (c) V2がV1の目的語となっているもの
- の3つがある。

5.1.1 繼起的な事象を表すもの

事象が生起した時間的順序に従って、動詞が並べられる次のようなものである。

- (1)
- $jə-$ $lε$ $p\varepsilon e$ $nā$ $l\varepsilon$ $phjá$ pu
1sg 行く 買う 魚 で 市場 中
「私は市場に魚を買いに行った」

(2)

- $?əwé$ $ləxi$ $θí$
3sg 転ぶ 死ぬ
「彼は転んで死んだ」

(3)

- $jə-$ $tō$ $ləxi$ $?ɔ$
1sg 殆る 倒れる 3sg
「私は彼を殴り倒した」

(1)から(3)の否定形は次の通りである。否定辞は常にV1の前に置かれる。V2の前に置かれるることは決してない。

(4)

- $jə-$ $tə-$ $lε$ $p\varepsilon e$ $nā$ $l\varepsilon$ $phjá$ pu $bā$
1sg (否) 行く 買う 魚 で 市場 中 (否)
「私は市場に魚を買いに行かなかった」

(5)

- $?əwé$ $tə-$ $ləxi$ $θí$ $bā$
3sg (否) 転ぶ 死ぬ (否)
「彼は転んで死ぬということはなかった」

(6)

- $jə-$ $tə-$ $tō$ $ləxi$ $?ɔ$ $bā$
1sg (否) 殆る 転ぶ 3sg (否)
「私は彼を殴り倒さなかった」

また、V1とV2の間に名詞句や前置詞句を置くことはできない。そのため、(7)は不適格である⁶⁾。

(7)

- * $jə-$ $lε$ $shú$ $phjá$ pu $p\varepsilon e$ $nā$
1sg 行く へ 市場 中 買う 魚

これは、接続助辞を用いて(8)のようにすれば適格な文となる。

6) ただし、ぞんざいな会話体などでは希にこのような文が現れることもある。

(8)

jə- lε shú phjá pu dɔ? p̥ye n̄â
 1sg 行く へ 市場 中 そして 買う 魚
 「私は市場に行って魚を買った」

注意すべきことは、継起的な事象を表す動詞連続が、ただ単に時間的に前後して生起した2事象を表すのではないということである。V1が表す事象とV2が表す事象との間には、それを結び付けるいくつかの関係が認められる。具体的には、V1とV2の表す動作・状態の主体が同一で、V2がV1の「目的」を表す場合と「結果」を表す場合、そして、V1の表す動作の対象とV2の表す動作・状態の主体が同一で、V1の表す動作によって対象にもたらされる結果をV2が表す場合（「対象の結果」と呼ぶ）の3通りがある。

まず、V2がV1の「目的」を表す例として、次のようなものがある。

(9)(=1)

jə- lε p̥ye n̄â l̄y phjá pu
 1sg 行く 買う 魚 で 市場 中
 「私は市場に魚を買いに行った」

(10)

?əwé ke xé ?əkhwa? l̄y ?əmò
 3sg 帰る 頼む 許し から 母
 「彼女は母の許可を求めに帰った」

(11)

jə- kə- ha? mí l̄y p̥ya h̄i
 1sg (叙想) 歩く 寝る で 人 家
 「私はよその家に泊まりに行く」

(12)

?əwé xó ?ɔ̄ n̄â
 3sg 焼く 食べる 魚
 「彼は魚を食べるため焼いた（焼いて食べた）」

(13)

?əwé p̥ye ?ɔ̄ n̄â
 3sg 買う 食べる 魚
 「彼は魚を食べるため買った（買って食べた）」

(9)から(13)の文において、V2の表す事象はV1の表す事象の目的であるといえる。例えば、(9)では、「私」が「魚を買う」という目的のために「行った」ということが表されている。同様に(13)では、「彼」が「魚」を「食べる」目的のために「買った」のである⁷⁾。「服を買いに市場に行ったが、偶然新鮮でおいしそうな魚を見つけたので買った」というような状況を(9)の文によって表すことはできない。同様に「実験のために魚を買いに行ったがおいしそうだったので食べた」というような状況を(13)の文によって表すことはできないのである。このような状況を表すには接続助辞を用いて次のように表現されねばならない。

(14)

jə- lε shú phjá pu dɔ? p̥ye n̄â
 1sg 行く へ 市場 中 そして 買う 魚

(15)

?əwé p̥ye n̄â dɔ? ?ɔ̄
 3sg 買う 魚 そして 食べる

V2の表す事象がV1の表す事象の目的であるということは、V2の表す事象の生起が、V1の表す事象の実現いかんにかかっているといえる。従って、2つの事象が完全に独立して生起することが可能なものであれば、動詞連続の形をとて表現されることはない。例えば、「私は彼を殴って蹴った」は、

7) V2の表す事象がV1の表す事象の目的であるということを視点を変えて見れば、V1の表す事象は、V2に表された目的を達成するための「手段」や「方法」であると捉えることができよう。従って、(9)では「買う」ための手段が「行く」ことなのであり、(13)では「食べる」ための手段が「買う」ことなのである。

(16)

jə- tɔ̄ ?ɔ̄ wi jə- thú ?ɔ̄
1sg 殆る 3sg それから 1sg 跳る 3sg

であり、動詞連続の形では表現されない。なぜなら「殆る」と「跳る」ことは独立して生起することが可能であり、「跳るために殆る」というような状況が普通はないからである。

なお、文が過去の事態を表している限り、V1の表す事象が実現したものであれば、V2の表す事象も実現済みである。従って次のような表現是不可能である。

(17)

*jə- xó ?ɔ̄ pâ bâshâ
1sg 焼く 食う 魚 しかし
jə- tə- ?ɔ̄ bâ
1sg (否) 食う (否)

しかし、V1がle「行く」he「来る」などの移動を表す動詞である場合には、V2が表す事象は実現している必要がない。従って、

(18)

?əwé le p̄e pâ l̄y phjá pu
3sg 行く 買う 魚 で 市場 中
bâshâ p̄e wé tə- nè bâ
しかし 買う(回顧)(否)得る(否)
「彼は市場に魚を買いに行ったが、買えなかつた」

という表現が可能である。この点で移動を表す動詞は特徴的である。

次に、V2がV1の「結果」を表すものを見る。

(19)(=2)

?əwé lɔxi θí
3sg 転ぶ 死ぬ
「彼は転んで死んだ」

(20)

lɔtè? nù? shú l̄y keshu? pu
落ちる 入る へ 石 隙間 中
「落ちて石の隙間にまり込んだ」

(21)

sî lɔtè? shú hâkhô lo
飛ぶ 落ちる へ 地面 上
「飛んだら地面のうえに落ちた」

(22)

?əwé hé ke thî ?ə- hî keshyô
3sg 来る(再現)見える 3sg 家 清潔な
「彼が帰ると、家がきれいになっていた(直訳: 彼が帰ると、きれいな家が見えた)」

(19)から(22)において、V2の表す事象は、V1の表す事象が生起した結果として、もたらされたものである。言い換えれば、V2が表すのは、主体の意志とはまったく無関係に生起した事象である。従って、V2として現れる動詞は、主体の意志によるコントロールが不可能な事象を表す場合が多い⁸⁾。

例えれば(19)の文では、V2が表す「死ぬ」という事象が、「転ぶ」という事象の生起によって、主体である「彼」の意志とは関係なく生起したことが表されている。この文では、「死んだ」原因は「転んだ」ことであると解される。「死んだ」ことが「転んだ」ことの

8)多くの動詞は、意志によるコントロールが可能であるかどうかが一義的に決まっている。例えば、lɔxi「転ぶ」とθε?θε?「故意に」を使って「わざと転ぶ」ということを表したいとき、lɔxi θε?θε?とすることはできない。なぜならlɔxiはコントロール可能な動詞ではないからである。「わざと転ぶ」は、使役動詞を用いて、ma lɔxi ?əθa? (使役動詞-転ぶ-自分)と表現しなければならない。しかし、動詞の表す事象によっては、意志によるコントロールが可能であるか不可能であるかが、状況によって異なる場合がある。例えば、(20)のnù?「に入る」は、ここではコントロール不可能であるが、「家に入る」などの場合にはコントロール可能である。

いかほど後でもかまわない。しかし、「転んだ後、病院に運ばれ、そこで赤痢で死んだ」というような状況を、この文が表すことはない。この文が表すのは、「転ぶ」と「死ぬ」ことの間に直接的な因果関係があるような状況なのである⁹⁾。

これまでに見た、V2がV1の「目的」や「結果」を表す場合においては、V1が表す動作の主体と、V2が表す動作の主体が常に同一であり、動詞連続の主語が、V1とV2に共通の主体であると解釈される。一方、V1とV2が共に目的語を取り得る動詞である場合には、主体と同様に動作の対象も常に同一であり、動詞連続の目的語がV1とV2に共通の対象であると解釈される¹⁰⁾。また、V1が目的語を取らない動詞で、V2が目的語を取り得る動詞である場合は、動詞連続の目的語はV2が表す動作の対象である。

V2がV1の「目的」や「結果」を表す場合においては、V1が目的語を取る動詞で、V2が目的語を取らない動詞であるような組み合わせは存在しない¹¹⁾。これは、次に述べる、V2が「対象の結果」を表す場合の組み合わせである。

V2が「対象の結果」を表すのは次のような場合である。

(23)(=3)

jə- tɔ̄ ləxi ʔɔ̄
1sg 殴る 倒れる 3sg
「私は彼を殴り倒した」

9) 従って、「結果」を表す動詞連続において、V1の表す事象は、V2の表す事象の「原因」を表すと捉えることができよう。

10) V1とV2の動作の対象が異なる場合、動詞連続の形で表現することはできない。例えば、「窓を開けて空を見る」は *qoqthô pestrôphô dɔ?* kwâ mûkâpolo (開ける-窓-そして-見る-空) であり、ここから接続助辞の *dɔ?* を省くとはできないし、たとえ *pestrôphô* 「窓」が現れていないとも *dɔ?* を省くことはできない。もし、*qoqthô kwâ mûkâpolo* (開ける-見る-空) とすると、「開ける」の対象も「見る」の対象も「空」であると解釈されてしまう。ただし、*jə- shá ɔ̄ jâ* (私-売る-食う-魚) 「私は魚を売って日々の糧を得ている」という、一見V1とV2の動作の対象が異なるかのように見える例があるが、これは多分に慣用句的である。

11) 従って、「毒を飲んで、死ぬ」は、「結果」を表す動詞連続として表現され得ず、接続助辞を用いて2文をつなげた形にしなければならない。

(24)

jə- shé? θí ʔɔ̄ dɔ? dɔ̄
1sg 刺す 死ぬ 3sg で ナイフ
「私はナイフで彼を刺し殺した」

(25)

jə- khwé keshyó jə- hî
1sg 掃く 清潔な 1sg 家
「私は家を掃いてきれいにした」

(26)

tri? nù? wé l̄ybó l̄y
はめる 入る(回顧) 石筆 に
ʔə- khô tə- kù?
3sg 頭 1 方
「石筆を(竹筒の)一方の端にはめ込んだ」

(27)

θá kl̄s θí taxɔ tə- dû
3sg 切る 死ぬ 鹿 1 (助数)
「彼は鹿を1頭切り殺した」

(23)から(27)の文では、V1が表す事象は対象に及ぶ動作であり、V2が表すのは対象がその動作を受けた結果生じた事象となっている。動詞連続の主語は、V1の動作の主体である。一方、動詞連続の目的語は、V1の動作の対象であると同時に、V2の動作・状態の主体でもある。なお、V1は対象に変化をもたらすような動作を表す動詞、V2は状態や状態の変化を表す動詞であることが多い。

ここで注意すべきことは、V2が表す事象が「意図された」または「予期された」結果だということである。それは次のような表現

が可能なことから明らかである。

(28)

- jə- tɔ̄ lɔ̄xi ʔɔ̄
1sg 殴る 倒れる 3sg
bâshâ tə- lɔ̄xi bâ
しかし(否) 倒れる(否)
「私は彼を殴り倒そうとした。しかし倒れなかった」

(29)

- jə- shε? θí ʔɔ̄ dɔ̄? d5
1sg 刺す 死ぬ 3sg で ナイフ
bâshâ tə- θí bâ
しかし(否) 死ぬ(否)
「私はナイフで彼を刺し殺そうとした。しかし死ななかった」

つまり、これらの文が発話された時点でV2が表す事象が既に生じている必要はないのである。この点で「目的」を表す動詞連続のうちV1として移動を表す動詞を持つものに似ている¹²⁾。

5.1.2 移動や存在の動詞をV1として持ち、継起的でないもの

5.1.1で見た動詞連続の中には、移動を表す動詞をV1として持つものが多く見られる。例えばlε pye(行く+買う)「買いに行く」などがあった。ここで見るのは、V1に移動を表すlε「行く」などを持つという点でこれと類似してはいるが、V1とV2が表す事象の生起が継起的ではない動詞連続である。

次に例を挙げる。V1として現れるのは、lεやhéなどの移動を表す動詞や、存在を表す?ôなどである。

(30)

- jə- kə- lε pò? ʔə- khí
1sg(叙想)行く 従う 3sg 後ろ
「私は彼に付いて行く」
- (31)
- ?əwé hé sò? θê l̄y p̄yà pu
3sg 来る 運ぶ 木 から 森 中
「彼は森から木を運んで来た」
- (32)
- ?ə- ?ô ʔə- sho? ʔə- l̄i ʔə- klé
彼らの住んでいるところ
nê ?ô p̄yε dɔ? ɻù
TOP ある 満ちた で 蛇
「彼らの住んでいる地方は蛇でいっぱいだ」
- (33)
- ʔə- θô ke wí xù? ʔɔ̄ l̄o
3sg 友 帰る 背負う(密着)3sg(丁寧)
「彼の友達は彼を背負って帰った」

lε pye「買いに行く」などにおいては事象が生起した順序に従って動詞が並べられているのに対して、これらの動詞連続におけるV1とV2が表すのは継起的な事象ではない。大抵の場合は同時的に生起した事象である。すなわち、V1が移動を表す場合には、V2がそれと同時に起こった動作を表し、V1が存在を表す場合には、V2が存在の主体に付随する状態を表す。特徴的なのは、後述する通り、時にV1とV2が継起的でも同時的でもなく、時間的流れに逆らって並べられているように見えることである。

このタイプの動詞連続の代表的なものを下に挙げておく。

- lε xè (行く+走る)「走って行く」
hé xè (来る+走る)「走って来る」
lε sò? (行く+運ぶ)「運んで行く」
hé sò? (来る+運ぶ)「運んで来る」
lε shy (行く+送る)「送って行く」

12) ここにおいても、V1は、V2が表す事象を生じさせるための「手段」や「方法」のようなものを表すと捉えられる。cf. 注7)

hé shv̥y (来る+送る)「送って来る」
 lε p̥ɔ? (行く+従う)「付いて行く」
 hé p̥ɔ? (来る+従う)「付いて来る」
 lε n̥w? (行く+入る)「入って行く」
 hé n̥w? (来る+入る)「入って来る」
 lε jo? (行く+持ち上げる)「持って行く」
 hé jo? (来る+持ち上げる)「持って来る」
 hé su (来る+雨が降る)「雨が降って来る」
 ?ô ji (ある+遠い)「遠くにある」
 ?ô ?á (ある+多い)「たくさんある」
 ?ô kho? (ある+待つ)「待っている」
 否定形は次の通りである。

tə- lε xè bâ
 (否) 行く 走る(否)「走って来ない」
 tə- hé sò? bâ
 (否) 来る 運ぶ(否)「持って来ない」
 tə- ?ô ?á bâ
 (否) ある 多い(否)「たくさんない」
 次に、V1とV2の並べ方が明らかに時系列に沿わない文例を挙げる。

(34)
 khli? nê tə- lε bô meshwí bâ
 亀 TOP(否) 行く 包む 冷御飯(否)
 「亀は御飯を包んで持って行かなかった」

(35)
 hé ke kló nê wâ dé phó tə- dé
 来る(再現)切る 得る 竹枝(指小辞)1(助数)
 「竹の小枝を1本切り取って戻って来た」

(34)では「行く」行為よりも「包む」行為のほうが、(35)では「来る」行為よりも「切る」行為のほうが明らかに時間的に先行している。しかし、両例とも、V2が表す行為が終わった後に「運ぶ」行為が続く場合にのみ、このような表現をとることができる。すなわち、御飯を包んだだけでそれを持たずに行くような状況では(34)は使われないし、竹の小枝を切り取っただけで帰ってきてしまうような状況では(35)は使われない。このような状況を表すためには次のように言う必要がある。

(36)
 bô meshwí dɔ? lε
 包む 冷御飯 そして 行く
 「御飯を包んでから行った」

つまり、時系列に逆らっているように見える場合でも、「運ぶ」行為が含意され、それが「行く」行為や「来る」行為と時間的に重なっているのである。同様に「買って来る」は「運ぶ」行為が伴うので動詞連続の形で表現できるが、「勉強をして来る」や「映画を見て来る」は、「運ぶ」行為が伴わないので、動詞連続の形で表現することができない。

(37)
 hé ke p̥ye nâ
 来る(再現)買う 魚
 「魚を買って来た」
 (38)
 (イ) maló p̥yakənɔ̄ klô? dɔ? hé ke
 学ぶ カレン 語 そして 来る(再現)
 「カレン語を勉強して来た」
 (ロ) hé ke maló p̥yakənɔ̄ klô?
 来る(再現)学ぶ カレン 語

(38)の(ロ)は、「カレン語を勉強するために来た」という意味にはとることができるもの、「カレン語を勉強して来た」という意味には決してならない。結局、時系列に逆らって見えるような場合においても、「行く/来る」行為と「運ぶ」行為が重なっており、同時的な事象を動詞連続が表しているのだと考えてもよいかも知れない。

ところで、V1として?ô「ある(いる)」が現れた次のような例において、

(39)
 ?əwé ?ô kho? na
 3sg いる 待つ 2sg
 「彼はあなたを待っている」

?ô が動作の進行を表している可能性があるのではないかとの疑問が生じるかもしれない。しかし, ?ô は位置の変化を伴う動作を表す動詞, 例えは「走る」とは共起できない。

(40)

*?əwé? ?ô xè
3sg いる 走る

これは, おそらく, ?ô が動作の進行を表すのではなく純粹に存在を表しているためであると思われる。(39)が表すのは「彼」がどこかに「いて」, そして同時に「あなた」を「待っている」という状況なのである。

また, ここに見た動詞連続が複合動詞である可能性はないと思われる。なぜなら, V1 と V2 の間に別の要素が入ることがあるからである。次の(41)においては, 上昇を表す補助動詞の thô が, V1 と V2 の間に現れている。

(41)

?əwé? le thô xè
3sg 行く(上昇)走る
「彼は走って登って行った」

ただし, V2 として現れる動詞があまり豊富とは言えず, 上に挙げたようなものに限られていることから, これらが多分にイディオム的な表現である可能性も否定はできないであろう。

5.1.3 V2 が V1 の目的語となっているもの

次の文に見えるような動詞は名詞句を目的語として取っている。

(42)

jə- ?êdo? tà ?i
1sg 欲する もの この
「私はこれが欲しい」

(43)

jə- tə- ?ê ?o bâ
1sg (否) 愛する 3sg (否)
「私は彼が好きではない」

(44)

jə- sa? thô tâma
1sg 始める(出現) 仕事
「私は仕事を始めた」

このような動詞が次のように動詞句を後ろに従えることがある。

(45)

jə- ?êdo? le shú cō
1sg 欲する 行く へ 学校
「私は学校に行きたい」

(46)

jə- tə- ?ê phô kəθú bâ
1sg (否) 愛する 料理する おかげ (否)
「私は料理をするのが好きではない」

(47)

jə- sa? thô malô
1sg 始める(出現) 学ぶ
「私は勉強し始めた」

(45)から(47)の文における動詞連続では, V2 の前に名詞化接頭辞の tà (単独では「もの」の意) を付けることによって動詞句を名詞句化する言い換えが可能である。

(45')

jə- ?êdo? tà le shú cō
1sg 欲する もの 行く へ 学校

(46')

jə- tə- ?ê tà phô kəθú bâ
1sg (否) 愛する もの 料理する おかげ(否)

(47')

jə- sa? thô tà malô
1sg 始める(出現) もの 学ぶ

従って, (45)から(47)のような文では,

V1がV2を主要部とする動詞句を目的語として取っていると考える¹³⁾。

一方、次の例を見ていただきたい。この動詞連続におけるV1はV2を目的語として取っているのだろうか。

(48)

pə- mè tə- ɻw̥?krε?sy? pha? ɔ
1pl もし(否) 努力する 読む 3sg
pə- klò? kə- lɔma
1pl 言葉(叙想) なくなる

「もし、それ(カレン文字)を読む努力をしなければ、私達の言葉はなくなってしまうよ」(「カレン語アルファベットの詩」より)

この文の前半部分における動詞連続のV2をtāによって名詞句化することはできない。

(48')

*pə- mè tə- ɻw̥?krε?sy? tā pha? ɔ ...

従って、(48)において、ɻw̥?krε?sy?「努力する」はpha?「読む」を目的語として取っていると考えることはできない。この動詞連続は、5.1.1で述べたV2がV1の「目的」を表す動詞連続なのである。

目的語となった動詞の動作の主体は、V1の動作の主体と同一である。2つの動詞の主体が異なる場合は、

(49)

jə- ?ēdo? l̩y nə- kə- ma tāma ɔi
1sg 欲する COM 2sg(叙想) する 仕事 この
「私はあなたにこの仕事をやってもらいたい」

のように、補文標識のl̩yを用いた複文にしなければならない。

5.2 本動詞+補助動詞

単独で述部を構成することのできない動詞のうち、V2として現れ、V1を修飾する働きを持つ動詞を補助動詞と呼ぶ。歴史的に見れば補助動詞は、本動詞が動詞本来の意味を失って抽象的な意味を表すようになったものである。東南アジア諸語には、このような動詞の意味の抽象化があまねく見られる。実のところ、補助動詞には否定辞が前接することがない。そのため、最初に設定した基準によるなら、動詞ではなく接辞として分類すべきなのであるが、音形が同一の本動詞が存在しており、かつ、その本動詞の意味と補助動詞の意味の間には無視することのできない類似が見られるため、本稿ではこれを動詞連続の中で論じることにしたい。

補助動詞には以下のようなものがある。

補助動詞	対応する本動詞の意味
kwà	見る
pà?	置く
kwì?	投げる、捨てる
ke	帰る
bâ	当たる、ぶつかる
pja?	見せる
nè	得る
thô	上がる
lɔ	下がる

上でも述べた通り、補助動詞に否定辞が付くことは決してない。否定辞は常にV1に付く。

(50)

jə- tə- ma kwà bâ
1sg(否) する (否)
「私はやってみなかった」

13) なお、動詞がそのままの形で主語になることは決してない。例えば、「走ることは良いことだ」は、tā xè ɻe(こと-走る-良い)であり、xè「走る」は名詞化接頭辞のtāによって名詞化されなければ主語の位置に立つことはできない。

これらの補助動詞のうち、対応する本動詞をV1として取ることのできるのは、kwà, pà?, kwì? の3つのみである。

(51) kwà kwà 「見てみる」

(52) pà? pà? 「置いておく」

(53) kwì? kwì? 「捨ててしまう」

この事実は、この3つの補助動詞の意味の抽象化が他に比して甚だしいことを示すのかかもしれない。

5.2.1 補助動詞の記述

以下では、各々の補助動詞の意味と用法を見ていく。括弧の中に対応する本動詞の意味を示す。

1) kwà (見る)

動作の試行を表す。

(54)

jə- tə- pha? kwà lì? qì bâ
1sg (否) 読む (試行) 本 この (否)
「私はこの本を読んでみなかった」

(55)

θí kwà ?ə- θô khli?
聞く (試行) 3sg 友 龜
「友達の亀に聞いてみた」

(56)

jə- kə- ma kwà tə- bô lɔ
1sg (叙想) する (試行) 1 回 (丁寧)
「一度やってみることにしましょう」

2) pà? (置く)

動作の結果の保持、あるいは、来るべき事態に対する備えを表す。

(57)

jə- kə- phó pà? me
1sg (叙想) 炊く (保持) 御飯
「ごはんを炊いておきますよ」

(58)

?o? thô pà? pêtrôphô
開ける (出現) (保持) 窓
「窓を開けておく」

(59)

mí pà? nò
寝る (備え) ね
「(疲れないように) 寝ておきなさいね」

3) kwì? (投げる)

動作の徹底あるいは容赦しない様子を示す。

(60)

təlê kwì? wé wâ tə- bô lì
転がす (徹底) (回顧) 竹 1 (助数) COM
?ə- hî phó dôdûpá mí təkhî wé
3sg 家 (指小辞) 家族 寝る 一緒に (回顧)
「(強盗達は) 彼女の家族が皆で (枕として) 使っていた竹を、思いきりはねのけた」

(61)

?ɔ lì? kwì? tâ?ô lì thôphô ?ə?a
食う 尽きる (徹底) 食物 (同格) 小鳥 他の
?ə- tâ?ô nê
3sg 食物 その
「(カッコウの子は) 他の小鳥が食べるはず の食べ物を食べてしまう」

(62)

?ə- θəko? səmadú ma kâ kwì?
3sg 友達 ソーマードゥー (使役) 壊れる (徹底)
?ə- lìbô
3sg 石筆
「彼の友達のソーマードゥーは彼の石筆を壊してしまった」

4) ke (帰る)

動作・状態の再現あるいはやり直しを表す。

- (63)
 nə- mè kwε? kəmā nē
 2sg もし 書く 誤り その
 nə- kə- bâ kwε? ke
 2sg (叙想)(当為)書く (再現)
 「もし間違っていたら書き直さなければなり
 ませんよ」

(64)
 jə- kə- kwà ke tǎyomú ?i
 1sg (叙想)見る(再現)映画 この
 「私はこの映画をまた見るつもりだ」

(65)
 pȳa tɔ tə- ya θēnō thō ke
 人 裕福な 1 (助数) 思い出す(出現)(再現)
 「その金持ちはまた思い出した」

5) bâ (当たる, ぶつかる)
 成り行きによって得た機会や成り行きに
 よって生じた事態を表す。

(66)
 pə- tə- thî bâ bâ
 1pl (否) 会う (機会)(否)
 「私達は会う機会がなかった」

(67)
 jə- tə- lε bâ shú kímé bâ
 1pl (否) 行く(機会)へ チェンマイ(否)
 「私はチェンマイに行ったことがない」

(68)
 tâ mō ?ɔ bâ ?ə- θa?
 物 したい 食う(成り行き) 3sg 心
 pədē ?ə- nâ
 うさぎ 3sg 肉
 「(彼は) うさぎの肉が食べたくなった」

この補助動詞には、多く状態を表す動詞に後接して、その状態の影響の受け手を表す名詞を後に従える用法がある。日本語には「～にとって」と訳すことができる場合が多い。

(69)
 ?ə- thu?plethí ləsɔ bâ ?əθa?
 3sg よだれ 流れる Bâ 自分
 「彼はよだれが出てきた (食欲が彼に沸き起
 こった)」

(70)
 mél̄ ?ə- θwà bâ ?ɔ
 ～なので 3sg 大きい Bâ 3sg
 「それは彼にとって大きかったので」

(71)
 xīla bâ ?ə- mè?
 美しい Bâ 3sg 目
 「彼女の目には美しく見えた」

6) pja? (見せる)
 動詞の提示を表す。この補助動詞を V2 と
 して持つ動詞連続は、動作の被提示者を目的
 語として取ることができる。

(72)
 jə- yekəlì? pja? ?ɔ
 lsg 踊る (提示) 3sg
 「私は彼に踊ってみせた」

V1 が目的語を取る動詞である場合、動詞連
 続の目的語は、被提示者を表す名詞句、対象
 を表す名詞句の順に並べられる。

(73)
 ?əwé pha? pja? ja li?
 3sg 読む (提示) lsg 文字
 「彼は私に字を読んでみせた」

(74)
 θa?wî pja? ja pȳakənō ?ə- tâθa?wî
 歌う (提示) 1sg カレン人 3sg 歌
 「私にカレンの歌を歌ってみせて下さい」

動詞 pja? はビルマ語 pya. 「見せる」の借用語
 である可能性が高い。私のインフォーマント
 達も皆そのような意識を持っているようであ
 る。カレン語固有の語彙として 提示を示す

動詞修飾辞 *jw* がある¹⁴⁾。

7) *nè* (得る)

与益を表す補助動詞である。この補助動詞を V2 として持つ動詞連続は、受益者を表す目的語を取ることができる。次に示す例からも明かなように、動詞連続の目的語は受益者を表す名詞、対象を表す名詞の順に並べられる。

(75)

kwe? *nè* *ja* *lì?* *tékè*
書く (与益) 1sg 手紙 (依頼)

「私に手紙を書いてください」

(76)

?əwé *phó* *nè* *ja* *me*
3sg 炊く (与益) 1sg 御飯
「彼は私にごはんを作ってくれた」

補助動詞 *nè* は、実際には *né* と発音されることも多い。これは対応する本動詞には見られない特徴である。

8) *thō* (上がる)

主に、上方への移動を表す。

(77)

təmlà? *le* *thō* *dw?* *hî* *tə-* *phlŷ*
強盗 行く(上昇) 襲う 家 1 (助数)
「強盗は盗みを働くためある家に上がって行った (家が高床式のため)」

この補助動詞については、5.2.2において詳しく述べる。

9) *lo* (下がる)

主に、下方への移動を表す。

(78)

mùxá *tə-* *ya* *hé* *lo* *shú* *hôkhô*
精靈 1 (助数) 来る(下降) へ 地上
「精靈がひとり地上に降りてきた」

この補助動詞についても、5.2.2において詳しく述べる。

なお、*thō* と *lo* を組み合わせたイディオム的な表現として *VthōVlo* がある。「様々なやり方で～する」という意味になる。

(79)

lý *tà* *phô* *thō* *phô* *lo* *lýbó* *?əpu*
で こと 扱う(上昇) 扱う(下降) 石筆 中
「石筆をあれこれいじっているうちに」

(80)

phé *?əwéθê* *ha?* *thô* *ha?* *lo* *wé* *?əkhá*
時 3pl 歩く(上昇) 歩く(下降)(回顧) 時
「色々なところへ出かけるときに」

5.2.2 補助動詞 *thō* と *lo*

(カレン語の「方向動詞」)

東南アジアから中国にかけての諸言語には「行く」「来る」「上がる」「下がる」「入る」「出る」などをはじめとするいわゆる「方向動詞」が、他の動詞を修飾して様々な意味を付け加えたりアスペクトを表したりする現象が広く見られる。カレン語も例外ではない。カレン語には方向動詞に相当するものとして、*thō* と *lo* の 2 つがある。上で述べたように、この補助動詞は基本的に「上方への移動」と「下方への移動」をそれぞれ表す。Jones (1961) も、それぞれ up, down と語釈を付けている (p.24)。確かに基本的にはそれでよいのであるが、実際にはそれだけではなく、「出現」および「消滅」と呼べそうな意味を表す用法がある。以下、具体的に見ていく。

まず、上の(77)(78)のように、移動を表す

14) 動詞に後接して動詞を修飾する助辞を動詞修飾辞と呼ぶ。*jw* 以外には、程度が甚だしいことを示す *ma?*、経験を示す *bú*、回顧的なニュアンスを付け加える *wé* など、十数個の動詞修飾辞がある。

動詞に付いた場合には *thô* が「上方への移動」を、*lo* が「下方への移動」を表すことが多い。

xè thô (走る+thô) 「走って登る」
xè lô (走る+lô) 「走って降りる」
ju thô (飛ぶ+thô) 「(鳥が) 飛び上がる」
ju lô (飛ぶ+lô) 「(鳥が) 飛んで降りる」
kəli pú thô (風+吹く+thô)
 「風が吹き上げる」
kəli pú lô (風+吹く+lô)

また、「投げる」「押す」「蹴る」などの対象の移動を表す動詞では、*thô* と *lois* はそれぞれ、対象の「上方および下方への移動」を表すことが多い。

kwì? thô (投げる+thô) 「投げ上げる」
 kwì? lô (投げる+lô) 「投げ下ろす」
 shô thô (押す+thô) 「押し上げる」
 shô lô (押す+lô) 「押し下げる」
 khû thô (掘る+thô) 「掘り出す」
 khû lô (掘る+lô) 「掘って埋める」
 kæto thô (話す+thô) 「上に向かって話す」
 (言葉が上方へ向かって移動する)
 kæto lô (話す+lô) 「下に向かって話す」
 (地上から話す場合など)

一方、次に挙げるような例を「上方や下方への移動」と捉えることはできないだろう。本稿ではこのような場合に、*thu* と *i* がそれぞれ、対象や状態などの「出現(発生)」および「消滅」を表していると考える。ただし、「消滅」には実際の消滅だけでなく、*hē* 「与える」の場合のように、対象物が動作主から遠ざかる場合も含む。

?	o?	lo	(開ける+lo) 「開ける」	
				(皮や蓋などの消滅)
shá	lo	(得る+lo) 「売り飛ばす」		(対象の消滅)
hé	lo	(与える+lo) 「与える」		(対象の消滅)
s̄š	th̄	(縛る+th̄) 「縛りあげる」		(縛った状態の出現)
θa?	w̄i	th̄	(歌う+th̄) 「歌う」	(歌の出現)
ha?	th̄	(歩く+th̄) 「出かける」		(家の中からの主体の出現)
?óphlé	th̄	(生まれる+th̄) 「生まれる」		(主体の出現)
kém̄kémâ	th̄	(驚く+th̄) 「驚く」		(感情の発生)
p̄yì	lo	(溶ける+lo) 「溶ける」		(氷の消滅)
?ḡ	lo	(認める+lo) 「譲歩する」		(自己の主張の消滅)

ここで例えば *ka* 「着る」は、単独で「着る」という動作を表すことができるわけだが、*tho* を付けると「勢いのある動作」といったニュアンスが加わる。また、1音節の動詞を音声的に補強する役割も果たしているようである。

状態を表す動詞に付いた場合には、動詞の表す状態が以前と比較して甚だしくなったことを表す。

bô thô (太っている+thô) 「太る」
 xë lô (痩せている+lo) 「痩せる」
 xîla thô (美しい+thô) 「美しくなる」
 thô thô (高い+thô) 「高くなる」
 phûlô (低い+lo) 「低くなる」
 kewô thô (円い+thô) 「円くなる」
 ýô thô (赤い+thô) 「赤くなる」
 sú thô (とがった+thô) 「とがる」

thô と lo がこのように状態を表す動詞に付いた場合にも、「出現」と「消滅」ということ非常に密接な関係がある。例えば bô 「太る」, xë 「痩せる」の例を取れば, bô は決して lô

と共に起することがなく、xeは決して th̄ と共に起ることがない。

*bâ lɔ (太っている+lo)

*xe th̄ (痩せている+th̄)

これは、「太る」のは「重さの出現・発生」と捉えられ、「痩せる」のは「重さの消滅」と捉えられているためだと思われる。状態を表す動詞は多くの場合 th̄ と lo のどちらか一方としか共起し得ないが、どちらとも共起することができるものがある。それは px 「平らな」と khâ 「寒い」である。px th̄ となるのは、しわのよった紙を平らにするような場合である。この場合は、平らな状態の出現と考えられる。px lo となるのは、山を崩して平地にするような場合である。この場合は突き出た部分の消滅と考えられる。一方 khâ がどちらとも共起するのは、同じ現象を別の側面から観察しているからであろう。khâ th̄ となる場合には「寒さ」の出現と捉えられ、khâ lo となる場合には「熱さ、暖かさ」の消滅と捉えられているのだと思われる。

なお、「上方や下方への移動」であるか「出現・消滅」であるかは、動詞によって一義的に決まるとは限らない。例えば hē th̄ (来る+th̄) は、「登って来た」と解釈されることもあるし、「来て現れた」と解釈されることもある。同様に、th̄pâ th̄ (浮かぶ+th̄) が表す状況も、「浮かび上がっていく」であることも「浮かんで現れる」であることもあります。

最後に、(a) th̄ と lo の両方と共に起し得る動詞、(b) th̄ とのみ共起し得る動詞、(c) lo とのみ共起し得る動詞、それぞれのリストを掲げる¹⁵⁾。

(a) th̄ と lo の両方と共に起し得る動詞

?o?	開ける	lε 行く
hε 来る		ha? 歩く

xè 走る	kəto 話す
sh̄y 見送る	kwì? 投げる
shâ 押す	thú 蹴る
khû 掘る	kəli ?ú 風が吹く
khâ 寒い	jwa 流れる
ju 飛ぶ	px 平らな

(b) th̄ とのみ共起し得る動詞

ka 着る	bé おいしい
sh̄ 甘い	hó 塩辛い
hé 辛い	khâ 苦い
θû 建てる	ke 燃える
p̄y 目覚める	?ophlé 生まれる
bâ 太っている	shá 痛い
θa? 痒い	θa?p̄yà 老いた
ha? 出かける	khlé 速い
do? 乗る	pha? 読む
θa?wî 歌う	th̄ph̄yô 集める
thú 卷く	sý 縛る
kəphó ふくらむ	θú 乾いた
bâsô 濡れた	shókəmô 考える
pli 怖がる	kəm̄kəmâ 驚く
θa?khâ 嬉しい	loθəka 凍る
kò 暑い	ly 暖かい
th̄phó 浮かぶ	mé 生える
kəwó 円い	sú 尖った
?ê 锐い	dô 大きい
thô 高い, 長い	tô 暑い
yo 赤い	lá 青い
wá 白い	θú 黒い
shú 強い	bâ 正しい
ye 良い	?y 悪い
blé すべっこい	θwε? ざらざらした
θó 新しい	lôli 古い
xíla 美しい	kəshyô 清潔な
bâ?y 汚い	ko 固い
bu? 近い	ji 遠い
jô? 深い	dô 浅い

15) このリストは約160の動詞について th̄ と lo が付くか否かをインフォーマントに聞いた調査に基づくものである。当然のことながら、意味的に th̄ とも lo とも共起し得ない動詞も多い。

lè 広い	pɛ いっぱいの
xý 重い	?á 多い
sa? 始まる	nàpý 分かる

(c) lɔとのみ共起し得る動詞

bê 脱ぐ	bɛt? 吐く
thúpýè? 吐き出す(唾)	xé 痩せた
pýi 溶ける	shókətò 止まる
kabé? のろい	kwe? 書く
hé 与える	shá 売る
plà 放す	xé ほどく
kló 切る	θóló 教える
su 雨が降る	khi? 暗い
lɔblý 沈む	lɔrwí? 枯れる
shi? 小さい	phú? 短い, 低い
bú 薄い	sà 弱い
képù? 柔らかい	?í 狹い
phýi 軽い	sýa 少ない
?ý 認める	

5.3 法動詞+本動詞

常にV1として現れる動詞で、決して単独では述部を構成することのない動詞を法動詞と呼ぶ。法動詞にはbâ, kry?, mô, dû?, maの5つがあるが、このうちdû?とmaは、これをV2として持つ動詞連続に被使役者を表す目的語を取らせる働きがあるので、特に使役動詞と呼ぶことにする。ただし、文法的には同一範疇に属する可能性もあるので、この区分は便宜的なものである¹⁶⁾。

5.3.1 法動詞 ba, kry?, mō

この3つの法動詞はそれぞれ次のような意味を持つ。

- bâ 「～しなければならない」
- kry? 「～したほうがよい,
～するのが適當だ」
- mō 「～したい」

これら3つのうち、bâには「当たる、ぶつかる」または「正しい」という意味の、同一音形の本動詞がある。またkry?にも同様に「ふさわしい」という意味の、対応する本動詞がある。

これら法動詞は、単独で述部を構成することができない。そのため、V2を従えずに単独で答えの文に現れることができない。

(81)

- jé- kə- bâ lë râ
 1sg (叙想) Bâ 行く (疑問)
 「私は行かなければならないでしょうか」
 mè, nə- kə- bâ lë
 はい 2sg (叙想) Bâ 行く
 「はい、いかなければなりません」
 *mè, nə- kə- bâ

(82)

- jé- kry? lë râ
 1sg Kry? 行く (疑問)
 「私は行ったほうがよろしいでしょうか」
 mè, nə- kry? lë
 はい 2sg Kry? 行く
 「はい、行ったほうがいいです」
 *mè, nə- kry?

(83)

- nə- mō ?ô theta? tâ râ
 2sg Mô 食べる 心 もの (疑問)
 「あなたは何か食べたいですか」
 mè, jé- mō ?ô
 はい 1sg Mô 食う
 「はい、食べたいです」
 *mè, jé- mō

この点で法動詞+本動詞の動詞連続は5.1.3で見た動詞連続とは異なる。5.1.3で見た動詞連続はV1のみによる答えが可能だからである。

16) 法動詞は、単独で現れることができないという点で助辞と見做すべきであるかも知れないのだが、動詞連続において否定辞が前接されるので本稿では動詞として扱っておくことにする。

(84)

nə- ?ɛdo? lε shú cō há
2sg 欲する 行く へ 学校(疑問)
「お前は学校に行きたいか」
mè, jə- ?ɛdo?
はい 1sg 欲する
「うん、行きたい」

この例では法動詞+本動詞の場合と違って、答えの文の述部が問い合わせの文のV1だけで構成されている。

否定辞は法動詞に前置される。bâの否定形は「～してはならない」または「～する必要がない」のどちらの意味にもなり得る。kr̥y?の否定形は「～しないほうがよい」の意味になる。

(85)

nə- tə- bâ lε bâ
2sg (否) Bâ 行く (否)
「あなたは {行ってはならない
/行く必要がない}」

(86)

nə- tə- kr̥y? lε bâ
2sg (否) Kr̥y? 行く(否)
「あなたは行かないほうがよい」

(87)

jə- tə- mō ?ɔ̄θa? tâ bâ
1sg (否) Mô 食う 心 もの(否)
「私は食べたくない」

bâは、多く叙想法を表す法助辞のkə-とともに使われる¹⁷。これにはbâの持つ意味の強さを和らげる働きがあると考えられる。そのため、deontic(義務的)な意味の強くないkr̥y?にはkə-が付くことはあまりない。

この3つの法助辞のうち、mōの使われた動詞連続では、(83)の例文にも見えるように、V2の直後に名詞θa?「心臓、心」が現れる。ただし答えの文では必須ではない。おそらく、mō~θa?はイディオム的な表現だと思われる。また、mōには形式主語tâを取る表現法がある¹⁸。このときmōの感情の主体は、θa?の前に置かれた人称代名詞前置形¹⁹によって表される。ここに普通名詞が現れることはない。また、V2の動作の対象には、場所を表す前置詞l̥yが前置されることがある。

(88)

tâ mō ?ɔ̄θa? (l̥y) me
Tâ Mô 食う 1sg 心 L̥y 御飯
「私は御飯が食べたい」

17) 注4)を参照のこと。

18) 形式主語tâは、元来「もの、こと」という意味を持つ。形式主語は次のような文に現れる。

① 感情・感覚を表す文

tâ blu? dōma?
Tâ 感謝する 非常に「大変ありがとう」
tâ θāwi jə- θa? l̥y me
Tâ 空腹だ 1sg 心 L̥y 御飯
「私は腹が減った」

② 天候・気象を表す文

tâ kò dōma?
Tâ 暑い 非常に「非常に暑い」
tâ hé su
Tâ 来る 降る 「雨が降る」

③ 主語を特に表す必要のないとき、または主語を特定したくないとき、tâが使われる。英語の受動文は、カレン語にこの形で訳されることも多い。

tâ t̥ò ja
Tâ 殴る 1sg 「私は殴られた」
tâ ma θí ?o
Tâ (使役)死ぬ 3sg 「彼は殺された」

19) 人称代名詞には、動詞・名詞の前で用いられる前置形と、動詞・前置詞の後で用いられる後置形がある。例えば1人称単数代名詞の前置形はjə-, 後置形はjaである。

tà	mô	?ô	nə-	θa?	(l̩)	me
			2sg			
tà	mô	?ô	ŋə-	θa?	(l̩)	me
			3sg			
tà	mô	?ô	pə-	θa?	(l̩)	me
			1pl			
tà	mô	?ô	θú	θa?	(l̩)	me
			2pl			
tà	mô	?ô	ŋəwéθêŋə-	θa?	(l̩)	me
			3pl			

一般的に、形式主語 tà が使われると、主体のコントロールが及ばないというニュアンスが生じる。よってここでも、自分の意志とは無関係に欲求が生じてしまったということが表される。

5.3.2 使役動詞

使役動詞には d̩w? と ma の 2つがある。この 2つには音形的に対応する本動詞があり、d̩w? は「戦う、襲う」、ma は「する、作る」という意味を持つ。

この 2つの動詞は、これを V1 として持つ動詞連続に被使役者を表す目的語を取らせる働きがある。

(89)

jə-	d̩w?	lε	?ɔ
1sg (使役)	行く	3sg	
「私は彼に行かせた」			

この文における V2, lε 「行く」は、目的語を取らない動詞であるが、動詞連続 d̩w? lε は、目的語として ?ɔ 「彼」を取っている。この「彼」は、「行かせる」という行為の被使役者であり、V2 が表す動作の主体でもある。使役の遂行者は、動詞連続の主語が表すところの「私」である。

V2 が目的語を取る動詞の場合は、次のような語順になる。

ja-	d̩w?	p̩ye	?ɔ	l̩?
1sg (使役)	買う	3sg 本		
「私は彼に本を買わせた」				

動詞連続の後に、被使役者を表す名詞句、V2 の動作の対象を表す名詞句、の順で現れる。

次の例は、V2 が 2つの目的語を取る動詞の場合である。

(90)

nə-	d̩w?	hē	ja	l̩?	l̩	?ɔ
2sg (使役)	与える	1sg 本	に	3sg		
「あなたは私に命じて彼に本を渡させた」						

このように、V2 が表す動作の受領者は、場所を表す前置詞 l̩ に導かれて現れる。

当然のことながら、法動詞である使役動詞は、単独で述部を構成することができない。

(91)

nə-	d̩w?	lε	?ɔ	há
2sg (使役)	行く	3sg (疑問)		
「あなたは彼に行かせましたか」				
mè, jə-	d̩w?	lε		
はい 1sg (使役) 行く				
「はい、行かせました」				
*mè, jə- d̩w?				

(92)

nə-	ma	θí	?ɔ	há
2sg (使役)	死ぬ	3sg (疑問)		
「おまえが彼を殺したのか」				

mè, jə-	ma	θí	?ɔ	há
はい 1sg (使役) 死ぬ				
「はい、殺しました」				
*mè, jə- ma				

否定形は次の通りである。

(94)

jə- tə- dw? lε ?ɔ bâ
 1sg (否)(使役) 行く 3sg (否)
 「私は彼に行かせなかつた」

(95)

nə- tə- ma θí ?ɔ bâ
 2sg (否)(使役)死ぬ 3sg (否)
 「お前は彼を殺さなかつた」

注意すべきは、V2が表す事象の生起は「予期されたもの」であって、発話時点においてこれが実現している必要はないということである。従って、次のような表現が可能である。

(96)

jə- dw? lε ?ɔ
 1sg (使役) 行く 3sg
 bâshâ ?əwé tə- lε bâ
 しかし 3sg (否) 行く (否)
 「私は彼を行かせようとした。しかし彼は行かなかつた」

(97)

jə- ma θí ?ɔ
 1sg (使役)死ぬ 3sg
 bâshâ ?əwé tə- θí bâ
 しかし 3sg (否)死ぬ(否)
 「私は彼を殺そうとした。しかし彼は死なかつた」

使役動詞を用いた表現は、意味的に日本語の「～させる」よりむしろ「～させようとする」に近いと言えるかも知れない。

次に dw? と ma の違いを見る。dw? と ma の特徴は次のようにまとめられる。

- dw? が用いられるのは、V2 が表す事象の実現に使役の遂行者が直接的コントロールを有しない場合である。

- ma が用いられるのは、V2 が表す事象の実現に使役の遂行者が直接的コントロールを有する場合である。

言い換えれば、V2が表す事象の実現に、使役の遂行者が最終的な権限を持ち合わせていない場合に dw? が用いられ、最終的な権限を持っている場合には ma が用いられるのである。

被使役者が有生物である場合には、dw? は使えるが ma は使えないことが多い。なぜなら V2 の表す事象の実現が、最終的には被使役者の意志に委ねられるからである。

(98)

jə- dw? lε ?ɔ
 1sg (使役) 行く 3sg
 「私は彼に行かせた」

(99)

*jə- ma lε ?ɔ
 1sg (使役) 行く 3sg

ここで「行く」という行為は、被使役者である「彼」の意志がなければ実現しない。よって dw? しか用いることができない。このことは次の例でも同様である。

(100)

jə- dw? nà? ?ɔ
 1sg (使役)信じる 3sg
 「私は彼に信じさせた」

(101)

*jə- ma nà? ?ɔ
 1sg (使役)信じる 3sg

「信じる」ことは最終的には被使役者である「彼」の意志に委ねられる。そのためここでも dw? が用いられ、ma は用いられない。

しかし、被使役者が有生物であっても、V2 の表す事象の実現が遂行者のコントロール下にある場合、dw? ではなく ma が用いられる。

(102)

jə- ma lɔtē? ɻɔ
1sg (使役) 落ちる 3sg
「私は彼を突き落とした」

この例は「人を崖から突き落とす」のような状況を表す。使役の遂行者に突き落とす体力などの条件さえ整っていれば、被使役者の意志に関わりなく「落ちる」という事象は実現する。よって *ma* が用いられる。ところが、同じ *lɔtē?* 「落ちる」が、*dw?* と共に起する場合もある。

(103)

jə- dw? lɔtē? ɻɔ
1sg (使役) 落ちる 3sg
「私は彼に(試験に)落ちさせた」

この文が表すのは、ある試験に合格するための能力を十分に持った人物にわざと落第させるような状況である。このような状況では、「落ちる」という事象の実現は最終的には被使役者の意志にかかっているので、*ma* ではなく *dw?* が用いられるのである。

V2が「泣く」というような感情に関わる動詞である場合、多く *ma* が用いられる。

(104)

jə- ma hɔ phóθâ
1sg (使役) 泣く 子供
「私は子供を泣かせた」

感情が沸き起こるのは意志によっては如何ともしがたい。そのため *ma* が用いられる。しかし、嘘泣きをさせるような場合であれば、事象の実現は被使役者の意志にかかっているので *dw?* が用いられる。

被使役者が無生物である場合には、ふつう、*dw?* は用いられず *ma* が用いられる。

(105)

jə- ma lɔtē? lì?
1sg (使役) 落ちる 本
「私は本を落とした」

無生物である「本」が「落ちる」ためには、使役の遂行者にそのような能力があれば十分である。つまり遂行者が事象の実現に直接的コントロールを有しているわけである。

しかし、被使役者が無生物であっても、「溶ける」「蒸発する」などの自然の力による変化を表す動詞では、*ma* だけでなく *dw?* も用いることができる。

(106)

jə- dw? pɻì lɔ thílɔθəka
1sg (使役) 溶ける(消滅) 氷
「私は氷を溶かした」

(107)

jə- ma pɻì lɔ thílɔθəka
1sg (使役) 溶ける(消滅) 氷
「私は氷を溶かした」

「放っておいて氷を溶かす」のが上の例、「火でむりやり溶かす」のが下の例である。氷を「放っておいて」溶かす場合、使役の遂行者の意志だけでは氷が溶けるとは限らない。気温が低ければ氷は溶けない。つまり「溶ける」との実現は「自然の力」にかかっているのであり、遂行者は直接的コントロールを持たないのである。このことは次の例でも同様である。

(108)

jə- dw? θí taphóxà
1sg (使役) 死ぬ 虫
「私は虫を殺した」

(109)

jə- ma θí taphóxà
1sg (使役) 死ぬ 虫
「私は虫を殺した」

上の例が表すのは、虫が瓶の中に落ちて苦しんでいるのを助けないで見殺しにするような状況である。虫が死ぬことは「自然の力」にかかっているのであり、もしかしたら死なないかも知れない。そのために *dw?* が用いられている。一方 *ma* が使われた下の例は押しつぶして殺すような場合である。遂行者に十分な力さえあれば殺せるのだから、遂行者は事象の実現に関して直接的コントロールを有しているわけである。

dw? と *ma* はこのように、事象の実現に対する使役の遂行者の直接的コントロールの有無によって使い分けがなされる。

なお、カレン語には対象の変化にまで言及する動詞が“欠けている”場合が多く、例えば角田（1991, p.73）に「原型的他動詞」の例として挙げられている15個の動詞、殺す、壊す、傷つける、作る、改良する、増やす、減らす、動かす、止める、溶かす、温める、隠す、覆う、与える、送る、に相当するカレン語を掲げると、

<i>ma θí</i>	殺す	<i>ma kà</i>	壊す
<i>ma bâdóshá</i>	傷つける	<i>ma kéthô</i>	作成する
<i>ma yethô</i>	改良する	<i>ma qáthô</i>	増やす
<i>ma s̥athô</i>	減らす	<i>θw?</i>	動かす
<i>dw? tù?</i>	(動きを)	止める	
<i>ma p̥yì</i>	溶かす	<i>ma kòthô</i>	温める
<i>pà?khúθû</i>	隠す	<i>ka?tì?</i>	覆う
<i>hê</i>	与える	<i>shy?</i>	送る

というように、半数以上が単純動詞ではなく使役動詞を用いた動詞連続によって表現されることになる。これと似たような傾向は地理的にカレン語に隣接するタイ語などにも観察される。

6. V1+te-+V2 となるもの

5. で見た動詞連続は、V1 の前に否定辞が置かれるものであった。ここで考察するのは V2 の前に否定辞が置かれる動詞連続である。次の例を見ていただきたい。

(110)

?əwé xè khlé

3sg 走る 速い

「彼の走り方は速い」

(111)

jə- ?ô shû

1sg いる 元気な

「私は元気でいる」

これらの否定形は次の通りである。

(112)

?əwé xè tə- khlé bâ

3sg 走る(否) 速い(否)

「彼の走り方は速くない」

(113)

jə- ?ô tə- shû bâ

1sg いる(否) 元気な(否)

「私は元気ではない」

このように否定辞が V2 に前置される動詞連続の例を次にいくつか掲げておく。

(114)

jə- pha? lì? wi lí

1sg 読む 本 終わる(完了)

「私は本を読み終わった」

(115)

jə- lε shú ?ə- ?ô khlu?

1sg 行く へ 3sg 所 暇な

「私は彼のところに行く暇がある」

(116)

nə- kətə p̥yakəp̥ó klò? θé

2sg 話す カレン 語 できる

「あなたはカレン語を話すことができる」

(117)

pə- kətə p̥yakəp̥ó klò? p̥ó

1pl 話す カレン 語 易しい

「カレン語を話すことは簡単だ」

(118)

jə- qō̄ me bε
 1sg 食べる 御飯 美味な
 「私は御飯を食べておいしかった」

(119)

tājō thō̄ θō̄
 夏 上る 新しい
 「新しい夏が来た」

一見して分かるように、否定辞が V2 に前置される動詞連続では、V1 と V2 の間に名詞句や前置詞句が現れることが少なくない。また V2 として現れる動詞は、状態を表す動詞であることが多い。そして、状態を表す動詞のほとんどがこのタイプの動詞連続の V2 として現れることができる²⁰⁾。なお、V2 には、補助動詞・法動詞・動詞修飾辞などの修飾要素が自由に付く。

次に、(110)を例にとってこのタイプの動

詞連続の特徴を考えてみよう。この文の内容は「彼の走り方」に対する客観的な判断である。「彼」が速く走ろうとしているかどうかは、この文からは分からぬ。この文を見て言えることは、彼が走っていて、その様子が客観的に見て速いということである。「彼」に速く走ろうとする意志がある、ということを表現するためには次のように言わなければならない。

(120)

?əwé xè khlé khlé
 3sg 走る 速い 速い
 「彼は速く走る」

すなわち、この文では khlé「速い」を畠語にしたものが用いられている。(110)では V1 の xè「走る」の前に否定辞を付けることができない²¹⁾。

- 20) このタイプの動詞連続における V2 は、多くの場合、目的語を取らない、状態を表す動詞である。ところが、目的語を取り得る動詞が V2 として現れることがある。それは下に示す 3 つの動詞であり、すべて広義の可能を表す。

(1)

jə- lε shú nə- hī kə- nè Rá
 1sg 行く へ 2sg 家(叙想)得る(疑問)
 「あなたの家に行ってもいいですか」
 (一般的な可能性を表す)

(2)

nə- kəto cōtē? klō̄? θé Rá
 2sg 話す タイ 言葉 出来る(疑問)
 「あなたはタイ語が話せますか」
 (能力を表す)

(110')

*?əwé tə- xè khlé bâ
3sg (否) 走る 速い (否)

しかし、(120)では xè 「走る」の前に否定辞を付けることができる。

(120')

?əwé tə- xè khlé khlé bâ
3sg (否) 走る 速い 速い (否)
「彼は速く走らない」

(120')では、「彼」に「速く走る意志」のないことが表される。これは、(110)の否定形である(112)では、「彼の走り方」に対する客観的な判断が「速くない」ということであるのと対照的である。おそらく(120)では疊語 khlé khlé が副詞的に xè 「走る」を修飾しているものと考えられる。

このように、一般的に言って V1+tə-+V2 となる動詞連続の V2 は、V2 に先行する部分で述べられたことに対する話者の客観的判断を表す。そのためか、V1 と V2 の関係は緩いものであるらしく、V2 が表す動作・状態の主体は、V1 の主語であったり、目的語であったり、あるいは V2 に先行する部分で述べられた内容そのものであったりと、実に多様である²²。

7. tə-+V1+(tə-)+V2 となるもの

ここで述べるのは、否定形で V1 と V2 の両方に否定辞が前置され得る動詞連続である。例えれば次のような例がある。

(121)

θə? sh̄y θə? kət̄
動かす 時間 動かす 時間
「(予定を) 遅らせる」

(122)

dō th̄ ?á th̄
大きい(出現)多い(出現)
「発展する」

(123)

?ə- təkū l̄y th̄ p̄yε th̄ l̄
3sg 計画 成就する(出現)満ちる(出現)(完了)
「彼の計画は成功した」

(124)

?əwé ha? th̄ ha? l̄
3sg 歩く(出現)歩く(消滅)
「彼は色々なところに出かけている」

(125)

?̄y l̄ ?̄y l̄
認める(消滅)認める(消滅)
「譲歩する」

否定形は次の通りである。ただし、否定辞は V1 の前だけに置かれることもある。

(121')

tə- θə? sh̄y (tə-) θə? kət̄ bâ

(122')

tə- dō th̄ (tə-) ?á th̄ bâ

(123')

?ə- təkū tə- l̄y th̄ (tə-) p̄yε th̄ bâ

(124')

?əwé tə- ha? th̄ (tə-) ha? l̄ bâ

(125')

tə- ?̄y l̄ (tə-) ?̄y l̄ bâ

21) V1 に否定辞を前置した(110')のような文はビルマのカレン語では非文であるが、タイのカレン語では、このような表現が可能である。

22) V2 の主体が何であるかが特定でき、それが V2 の種類によって固定していれば、V2 の下位分類が可能かもしれない。しかし問題はそう簡単ではない。例えば(110)では「速い」の主体は「彼の走り方」とも考えられる。しかしながらカレン語では、?əwé khlé (彼+速い)「彼は速い」という表現も可能なのであって、「速い」の主体は「彼」かも知れない。V1+tə-+V2 となる動詞連続には、このような問題や、統語的振舞による下位分類の可能性など、解明すべき問題が多く残されている。

これらの特徴は、同一の動詞または似た意味の動詞（動詞連続）が対等に並べられているということである。このタイプの動詞連続では、上の例でも明かな通り、V1とV2が単一の動詞ではなく、すでに動詞連続の形を取っていることが多い（122～125）。また、例えば（121）では、名詞 shý と kətɔ̄ ともに時間という意味を表す。このように各動詞の後ろに似た意味の名詞が現れることが多い。次の（126）もその例である。

(126)

tw̥ ʔə- mí lí nē
 とき 3sg 寢る 完了 その
 tə- θēpá θū tə- θēpá θa?
 (否) 知る 肝臓 (否) 知る 心臓
 「彼女は一度眠ってしまうと、何もわからなくなってしまう」

このタイプの動詞連続には、この（126）を始めとして、イディオム的な表現が多い。

8. おわりに

最初に述べたように、東南アジアのSVO型言語には動詞の間に名詞句や前置詞句が介在

する動詞連続が多く見出される。カレン語でも、V1+tə+V2となる場合と tə-V1+tə-V2となる場合には名詞句が動詞の間に介在することがある。しかし、tə-V1+V2となる場合には、動詞と動詞の間に名詞句や前置詞句などが現れることが決してない。つまりカレン語は、SVO型言語でありながら、名詞句を介在させる動詞連続をふんだんに持つとは言えない。Solnit (1986) に示されたカヤー語では、本稿のV1+tə-+V2となる動詞連続に相当する表現においても、次に示す文のように、名詞句が動詞と動詞の間に置かれていません（p. 132）。

ʔa ʔe phre di
 3 eat fast rice
 He eats quickly

また、Jones (1961) のPART FOUR. TEXTSにのせられたパレイチ・カレン語(Palaychi)とポー・カレン語(Pho)の動詞連続も、名詞句が介在することを好まないという特徴を持っているようである。カレン諸語がこのような特徴をいかにして持つに至ったかを考えることも、今後の研究課題として残されている²³⁾。

23) ただしタイのスゴー・カレン語（以下TK）では、比較的頻繁に、名詞句や前置詞句が介在した動詞連続が見られる。以下に例を示す。

TK

cə- le kà? pYe nā
 1sg 行く 市場 買う 魚
 「私は市場に行って魚を買った」
 cf. ビルマのカレン語（以下BK）
 jə- le shú phjá dɔ? pYe nā
 1sg 行く へ 市場 そして 買う 魚
 また TK では、BK の tə-+V1+V2 となるものに対応する動詞連続で、V2に否定辞が付くことがある。

TK

?əv̥é ləxi tə- sí bâ
 3sg 転ぶ (否) 死ぬ (否)
 「彼は転んだが死ななかった」
 cf. BK
 ?əw̥é tə- ləxi θí bâ
 3sg (否) 転ぶ 死ぬ (否)

TK

cə- thó sàmíjɔ́ sí
 1sg 殴る 猫 死ぬ
 「私は猫を殴り殺した」
 cf. BK
 jə- dō θí θāmíjɔ́
 1sg 殴る 死ぬ 猫

今後は、本稿で扱ったカレン語の動詞連続が統語論であるか、形態論であるかといった問題、あるいは文法的振舞いの微細な差異についてさらに研究を進めていかなければならない。

なお、本稿をまとめにあたって、東京大学教授湯川恭敏先生から多大な御指導をいただいた。また、東南アジア言語学や北タイにおける調査などに関して、東京大学教授土田滋先生、東京外国語大学教授三谷恭之先生、

東京外国语大学AA研教授坂本恭章先生から貴重な御教示をいただいた。末筆ながら、記して感謝の意を表したい。

〈略号〉

TOP	主題化標準	COM	補文標識
1sg	1人称単数	1pl	1人称複数
2sg	2人称単数	2pl	2人称複数
3sg	3人称単数	3pl	3人称複数

参考文献

- Anonymous. 1953. *The first year Karen language study*. American Baptist Language Committee, Chiengmai.
- 載慶夏, 劉菊黃, 傅愛蘭. 1987. 「克倫語初探」『中央民族学院学報』6, 50-56.
- 載慶夏, 劉菊黃, 傅愛蘭. 1991. 「克倫語」『藏緬語十五種』, 388-414 載慶夏, 黃布凡, 傅愛蘭, 仁增旺姆, 劉菊黃編, 北京燕山出版社, 北京.
- Filbeck, D. 1975. "A grammar of verb serialization in Thai." *Studies in Tai linguistics in honor of William Gedney*, 112-129. Ed. by J. G. Harris, J. R. Chamberlain, Bangkok.
- Goral, D. R. 1986. *Verb concatenation in Southeast Asian languages: A cross-linguistic study*. Ph. D. dissertation, University of California, Berkley.
- Jones, R. B. 1961. *Karen linguistic studies, description, comparison, and texts*. University of California Press, Berkeley, Los Angeles.
- 加藤昌彦. 1991. 『カレン語の述部構造』東京大学修士論文.
- Kato, A (加藤昌彦). 1991. "On three Karen particles *di?*, *lî* and *lx*: the Karen version of 'still' and 'anymore'." 『東京大学言語学論集』, 97-117.
- Matisoff, J. A. 1973. *The grammar of Lahu*. University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London.
- Mikami, N. 1981. "Serial verb construction in Vietnamese and Cambodian." 『言語研究』79, 95-117.
- 峰岸真琴. 1986. 「クメール語の動詞連続における /baan/ の意義について」『東京大学言語学論集 '86』, 45-57.
- 西田龍雄. 1967. 「ビルマにおけるパオ族の言語について—南方パアン方言覚え書—」『言語研究50』, 15-33.
- Noss, R. B. 1965. *Thai reference grammar*. English Language Center of the University Development Commission, Bangkok.
- Okell, J. 1969. *A reference grammar of colloquial Burmese*. Oxford University Press, London, Bombay, Kuala Lumpur.
- Purser, W. C. B. 1922. *A comparative dictionary of the Pwo-Karen dialect*. American Baptist Mission Press, Rangoon.

- Ratanakul, Suriya. 1981. "Transitivity and causation in Sgaw Karen." *Linguistics Across Continents, studies in honor of Richard S Pittman*, 156-179, Summer Institute of Linguistics (Philippines), Manila.
- 1983. "Three copulative verbs in Sgaw Karen." *Computational Analyses of Asian and African Language*, No. 21, 93-108, AA 研.
- 1986. *Phótcaanaanúkrom phaasăa Thai-Kàrięg Sàkoo* (Thai-Sgaw Karen dictionary), Institute of Language and Culture for Rural Development Mahidol University, Nakorn Pathom.
- 坂本比奈子. 1985. 「タイ語の動詞の下位分類について」『アジア・アフリカ言語文化研究』30, 177-192.
- 澤田英夫. 1989. 「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」『言語学研究』第7号, 73-110, 京都大学言語学研究会.
- Smeall, Ch. 1975. "Grammaticalized verbs in Lolo-Burmese." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 2. 2, 273-287.
- Solnit, D. B. 1986. *A grammatical sketch of Eastern Kayah (Red Karen)*. Ph. D. dissertation, University of California, Berkley.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版, 東京.
- Vichit-Vadakan, Rasami. 1975. "The concept of inadvertence in Thai periphrastic causative constructions." *Syntax and Semantics* 6, 459-476, Academic Press, New York, San Francisco, London.
- Wade, J. 1954. *The Anglo-Karen Dictionary*. Baptist Board of Publications, Rangoon.
- Wheatley, J. K. 1985. "The decline of verb-final syntax in the Yi(Lolo) languages of south-western China." *Linguistics of the Sino-Tibetan area : the state of the art* (= Pacific Linguistics, Series C – No.87), 401-20.
- 戸司郎. 1975. 「ビルマ語の述部の構造覚え書き」『アジア・アフリカ文法研究』4, 41-52.
- 1988. 「カレン語群」『言語学大辞典』, 1312-1318, 三省堂, 東京.
- 湯川恭敏. 1975. 「チベット語の述語」『アジア・アフリカ文法研究』4, 1-14.